
Deep Bond

SRNEKO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Deep Bond

【Nコード】

N1455B

【作者名】

SRNEKO

【あらすじ】

十年以上、親友だと思っていたあいつを、僕は、殺したいと思ってしまった。

彼の存在は絶対だ。私は彼を信じない人の存在を認めない。だから私は、彼を人間じゃないと言う彼女を殺す。

あの男の存在は許されるものじゃない。彼に関わった人間は、皆死ぬ。ならば、私は彼を殺し、そして私も死ぬ。それですべては終わ

るのだ。

俺は親友を死なしてしまった。否、もともとそのつもりでいたのだ。しかしそのショックはあまりにも大きかった。だから俺は、すべてを委ねることにする。

序章 篁祐爾の章

プロローグ たかむらゆつや 篁祐爾の章

文武両道で、目鼻立ちが整い、常に笑顔を絶やさない優しく性格の良い男なんていうのは、僕としてははないと思う。神は人に二物を与えない筈であるのに、これではその言葉は間違いである。ということから（それだけではないが）、僕は神を信じていない。しかもその二物以上を与えられた男が、僕の幼馴染で、それについて親友だというのだ。それは良いことでもあるのだが、同時に僕に対しての陰湿な虐めが繰り返されている。

彼の名前は菊田銀次。周りからはギンちゃんと呼ばれている。彼は現在一人暮らしをしているが、二年前までは家族四人で暮らしていた。そのときの家が、僕の家から道路を挟んだ向かい側にあり、僕らはまるで兄弟のようにして育った。

そんな彼は何でもできるし、容姿も申し分ないため、周りから多くの注目を集めた。そして高校生になってからというもの、いつも一緒にいた僕は、彼と比べられ、その存在自体にコンプレックスを抱くようになった。いずれそれは限界に達し、僕は彼を鉄柵の無い屋上へと呼び出した。ここには自分の腰の高さほどの塀しかないため、誤って人が落ちるということも可能性としては有り得る。創立以来、事故が無かったのは奇跡に近いように感じるが、僕はそれを感謝している。

彼が来て、塀の側で僕の思っていることを伝えた。僕のこの先の未来のため、君は邪魔なのだ。今まで仲良くしてくれて、ありがとう。そして僕は、彼を突き飛ばした。しかし彼は僕の腕を両手で掴み、目一杯引いた。そうして彼はギリギリのところまでまり、代わりに僕は頭から裏庭に向かって落下した。

落ちている最中、彼が僕を見下ろしていることに気付いた。彼は

口の端を歪め、微笑んでいた。

そのとき、僕は全てを覚った。

何もかも、彼の筋書き通りなのだ。きつと、だいぶ前から僕は不要だったのだ。いや、もしかしたら、出会ったそのときから、僕は邪魔者だったのかもしれない。彼の性格を考えれば、今まで僕が生きていたのは、ただ単に彼の気紛れだったのかもしれない。

嗚呼、全ては彼に関わってしまったのがいけないのだ。彼は、普通じゃないんだ。

そういえば半年前、彼に彼女ができた。僕らと同一年で、三年間クラス委員を務めた女性だ。そんな彼女も容姿端麗で、それでいて眼鏡が似合う知的な女性だった。僕は一年生の入学式の日、彼女を見たそのときから好きだった。一目惚れだった。けれど自分に自身のない僕は、告白する勇気などなかった。そして半年前、彼女は菊田に告白した。

僕は心からお似合いのカップルだと思った。二人ならうまくいく。こんな僕というよりも、彼といたほうが、彼女も幸せになれる。そう思っていた。しかし彼の本性を知った今、彼女のことを心配でならない。

菊田銀次。もしも彼女を死なせたりしたら、僕は君を許しはしない。

決して、許しはしない

第一章 太田亜季の章

第一章 太田亜季の章

太田亜季

私が彼と付き合うようになってちょうど半年が経った頃、彼に良くくっついていてた篁が、彼を殺そうとして死んだ。彼は篁の手を掴んだことを悔いていた。しかし私は彼の行動は的確なものだと思う。だって、篁よりも彼のほうが明らかに優れた人間であるのだから。それを彼にわからせるため、言葉を変えて伝えた。それでも彼は自分の行いを悔いた。俺が死ねばよかったのだと、何度も言い続けた。その時だ。私は自分を最低な人間だと思った。だって、これほどまでに彼に想われている篁に、嫉妬してしまっただから。彼の中から、篁祐爾という存在を消し去りたい。彼に、私だけを見ていて欲しい。もう、存在しない人間なんて忘れて欲しい。そう思い始めてから、一年が経った。

私は彼ほど学力が無かったけれど、同じ大学に通うため、寝る時間を割いて勉強をした。しかし結局は彼の望む大学に合格はできなかった。私はもう一つ下のランクの大学に合格して、そこに通っていた。

同じ学校には通えなかったけれど、それでも私たちは二日に一回は会っていた。これは彼が言い出したことで、私はとても嬉しかった。だって、学校も全然逆の方向なのに、こんなにたくさん合えるだなんて思ってもいなかったから。一週間に一度会えば良い方なのだと思っていたから。

そして私は、彼と会うときに、大学の友人を連れて行くことが多くなった。私は彼を自慢したかったのだ。彼に会う友達は皆、期待通りの反応を見せてくれる。それを見ていて本当に楽しかった。も

う簗のことなどどうでも良かった。彼だって簗のことは話さないし、きっともう忘れているのだ。もう、私だけを見てくれているのだ。そう思いかけていたとき、私の邪魔者が現れた。

順藤恵莉すんどうえり。大学に入ってから出来た、一番の友達、いや、親友とも呼べるような間柄の彼女だけは、皆と違う反応を示した。最初彼を見たときは、皆と殆ど同じだったのだけれど、話をするにつれて、彼女の顔から笑顔が消えた。そして彼女は、私の耳元で囁いた。

「彼、普通じゃないよ」

私はその言葉の意味がわからなかった。彼は普通じゃない。そんなこと、見ればわかることだ。あれほどできた人間はこの世にそうたくさんいるものではない。だから普通の人とは違う。普通じゃないのは当たり前なのだ。けれど、彼女の表情からその言葉は良い意味として捉えることができなかった。彼女は彼を恐れている。そう見えた。

「だって、会ってからずっと笑ってるんだよ？そんなの人間として間違っているよ」

それからだ。私は彼女と口を利かなくなった。彼女が話しかけてきても無視した。彼女は間違っている。彼は、私の友達だからと、笑顔を絶やさないでいてくれたのだ。その行為をおかしいなど言うなんて、人間として間違っているのは彼女のほうだ。

不愉快だ。彼を貶す人間なんて、この世から消えてしまえば良い。消える　消える消える消える消える　キエ口。

私の中の何かが外れたような気がした。

順藤恵莉

私は亜季と遊ぶことになった。その日は彼女の彼氏も一緒に、もしかしたら悪いことをしたと思った。

亜季が私のことを紹介している間、私はずっと彼のことを見ていた。とても優しそうな感じがして、こんな人といられる亜季はとて

も幸せな人だと思った。しかしそれは間違いだった。彼と話をしていると、私は気持ち悪くなってきた。けれどそれを気付かれないように表情は変えないでいた。そうだ、今の私がやっていることと同じようなことを彼はしているのだ。きっとそれは、私の前だけではない。今までも何人もその友達が会いに来ていたというから、彼女らはこの仮面に騙されているのだ。だから私が彼のことをどうだったかと尋ねると、とても格好良く、優しい人だったというのだ。

私にはこの菊田銀次という人間が容易に想像できた。彼は会う人によってその仮面を使い分けているのだ。それは些細な違いであっても付け替える。まったく同じ人間などいないのだから、彼にとつてそれは当たり前のことなのだ。だから彼が私と亜季と話をするときだつて一々仮面を付け替えている。

しかしそれは、感心すべきところでもあつた。こんな多種多様にある仮面を使い分けることができる人間なんてそうはいない。その点では、彼はとても優れた人間なのかもしれない。

ただ、私は彼には二度と関わりたくない。そう思った。

菊田銀次と会った二日後、亜季が私のことを避けていることに気付いた。最初は何かの冗談かと思つたのだが、それが何日も続くと本気なのだと解る。

そのとき初めて気付いた。あの男に会つたこと自体が間違いだったのだ。一度関わってしまったはその系からは逃れられない。たとえ彼の仮面に気付いていても、それは意味を成さないのだ。そして彼と付き合っている亜季は、その系に全身を覆われ、侵されている。だからこうして、私が彼に惹かれなかったのを見て、それだけで避けるようになった。

私は覺つた。

これが篁君を殺した男の仕業なのだと。
そして、次なる標的は、私なのだ。

太田亜季

恵莉は私が何をしようとしているのか気付いているようだった。私が彼女に近づかないようにしているのに気付くと、彼女もそれに合わせて私と口を利かないようにしていた。

しかしそれだけで私は諦めない。彼の魅力に気付かないような人間に生きる価値などない。だから決して彼女の存在を認めない。以前友達であった彼女は、もうすでにそれではない。単なる敵でしかありえない。

だから決めた。明日、私は彼女を殺す。

私は友達を使って、順藤恵莉を大学の駐車場に呼び出した。時刻は午後十一時を少し過ぎた頃、彼女はそこに現れた。私はそこに一台だけ停めてある車の中にいる。それは彼の車で、今日一日だけ借りることになっていた。

彼女は車の助手席側の窓を叩いた。彼女からは暗くて私の顔が見えないらしい。そうなるような場所に車を停めたのだから当然だ。

私は助手席側の鍵を開けた。そして彼女が乗り込み、ドアを閉めるのを確認すると、エンジンを掛けた。だがアクセルは踏まない。これは彼女の悲鳴を掻き消すためのものなのだから。

私は腰に携えていた果物ナイフを手に取り、それを思い切り彼女の腹部を目掛けて刺した。彼女は小さな悲鳴を上げ、驚いたような表情をしていた。そしてそれは、私も同じだった。間近で見たそれは、恵莉を呼びに行かせた友達だった。

何故あなたがここにいるの？ 私はあなたなんて呼んでいない。私が呼んだのは順藤恵莉。彼女はどこ。彼女は、どこ。

その時だ。運転席側の窓を、誰かがノックした。振り向くと、何か黒い穴がこちらに向いていた。それが何かを確認する間もなく、火花が散った。

私は、月明かりに照らされた、順藤恵莉の笑顔を見た。

第二章 順藤恵莉の章

順藤恵莉

手軽に誰もが扱えるような銃というのが、インターネットを通じて容易に購入できるなどとは思いもしなかった。ただ法外な金を払いさえすれば、送り先の書いていない紙の貼られた発泡スチロールの箱に入れられた拳銃が届く。

それを発砲したとき、その直後の爽快感といったらなかった。凄く気分が良かった。自分を殺そうとしていた人間を殺すことができた。最高ではないか。これさえあれば、私は菊田にだって負ける気はしない。あの人間の皮を被った男を、私は殺せる。

彼を殺せば、すべては丸く収まる。彼がいたから、私が好きだった簗君は死に、そしてあいつに侵された亜季までもが死んだ。あとは彼が死にさえすれば良い。いや、そのあと私も死ぬべきなのだろう。このことに関わってしまった人間は、誰一人として生きてはいけけない。そんな気がする。

あの菊田銀次は、ウイルスだ。すべての人間関係を破壊する。そして人々は争い、死に至る。それを彼は自由に引き起こせる。そんな人間がいていいのだろうか。否、そんなはずがない。神が存在するのであれば、絶対に菊田銀次を認めない。彼は存在すら許されない人間だ。

私は、彼を殺さなければならない。

私は亜季のような安易な考えはしない。彼女は頭も良く、それでいて人懐っこい性格であったが、あの男といることによって変わってってしまったみたいだ。そうでなければ、私を殺そうなどと考

えるはずが無い。

何故なら、私よりも彼女のほうが優れているから。成績だって彼女のほうが上。それはすべてにおいてそうだった。私たちは親友であると同時にライバルでもあった。私はそう思っていたのだが、彼女は違ったのだろうか。いや、最初はそうだったのだろうか。やはり何もかも、あの男が原因だ。あの男に関わることは許されない。

私は、自室で寛いでいた。今週中にもあの男を殺さなければならぬ。それと同時に、私もこの世から消え失せなければならない。何故なら、私も亜季同様、あの男に侵され始めているからだ。

私は変わってしまった。つい最近まで普通の大学生として、至って真面目な日常を過ごしていた。それはつまらないものであったが、けれどそれでいて充実した日々を過ごしていた。しかし篁君を殺した男の恋人が近くにいると知ったとき、彼女に接触せざるを得なかった。するとその人は、私が思っているような人間ではないことがわかった。きつと、あの男が篁君を殺したことを知らないのだと思った。だから彼女とは普通に接することができた。

そういえば、彼女には私だけの秘密を教えたことがあった。私には、篁祐爾という従兄がいて、私は彼が好きだったということ。そして彼が一年前に菊田銀次を殺そうとして、誤って転落死したということ。それを聞いた彼女は、彼のことを知らないようだった。同じ高校に通っていても、顔を知らないということは良くある話だから気にはしなかった。けれども、篁君が幼い頃から一緒にいた菊田を殺そうとするなど、考えられなかった。

篁君からは、菊田はとても良い人だと聞いていた。そして自分の兄のようだとも言っていた。それなのに殺そうとするなど、ありえない。きつと何かがあるはずなのだ。

そして私は、亜季に頼んで菊田に会わせてもらった。私がそれを頼んだとき、彼女は嬉しそうだった。それほど自慢の恋人なのだと思うた。

それからまだ一カ月半。つまり、菊田銀次に会ってからたったの一カ月半で、私は親友を殺してしまった。自分が殺されるのが嫌で、ただそれだけの理由で殺してしまった。けれど後悔はしていない。私は彼女を救ったのだ。どんなに犠牲を払ってでも、あの男だけは殺さなければならぬ。

そう思っていたある日のこと。その日は東京には珍しく、雪が降り積もっていた。

私はいつものようにあの男を殺す方法を考えながら、家路にしていた。ただその日は特別寒かったため、コンビニで暖かい食べ物と飲み物を買うことにした。おでんを専用の器に入れている最中に、背後から声を掛けられた。私は予想もしていなかった出来事に驚き、背筋が凍るような感覚がした。それと同時に恐怖した。

「あ、驚かせちゃったかな。ごめんね」

菊田銀次。彼が私に接触してきた。私はおでんの具を器に入れながら答えた。

「……いえ、大丈夫ですよ。でも、なんで菊田さんがこんなところにいるんですか？」

「別にたいした理由は無いよ。ほら、亜季が殺されちゃったからね。その上車も無くなった。もう僕には何も残っちゃいないから、適当にぶらぶら歩いていたんだよ。そうしたら偶然見知った顔を見たからね。ついつい声を掛けちゃったんだ。もしかして、迷惑だった？」

いつものユルイ表情で、そしてとても優しい声。これに騙される人がいるのは仕方無いことだと思う。だけど私はその手には乗らない。そのことは彼も知っているはずだ。なのに何故？

「迷惑なんかじゃないですよ。ただ、あんなに遠いところから良く来たな、って」

私は動揺しながらも、それを覚られないようにおでんの入った器と熱い缶コーヒーをレジに置きながら答えた。すると彼は財布を取り出し、千円札を店員に渡した。

「おつりはいらぬです」

彼はそう言つて、蓋をされたおでんと缶コーヒー、割り箸の入ったビニール袋を持って外に出た。私は慌ててそのあとを追った。

私は、彼の隣に立った。

「それ、なんで菊田さんが払ったんですか？」

「うーん、払いたかったからかな。それより、君の家に連れてつてよ。僕、今住むところ無くてさ」

私の部屋に、私と一人の男。この状況はまさに殺してくださいと言っているようなものだ。私は銃の入っている机の引き出しのすぐ前に座っている。そのためいつでも銃を取り出し、殺すことができる。だから私は、訊くことにした。

「何故、あなたはここに來たの？ 殺されるのが目的なの？」

彼は笑顔を崩さずに口を開く。ただ、いつもとは違う雰囲気だ。

「そうだね。殺されても良いと思つてゐる。僕と深い繋がりを持つてしまった人は必ず死んでしまふ。何故なんだろうね。死んで欲しくないと思んでも、彼らは皆死んでしまふ。君、祐爾のこと好きだったんでしょ？ 知つてゐるよ。前に、君に告白されたと聞いたから。それと、亜季を殺したのは君だ。原因はやっぱり僕なんだけだね。ただ、関係のない人を巻き込んだのは君の責任だ。僕には関係ないよ。まあ、僕を殺したあと自分も死のうとしてゐる人間には、何を言つても無駄なんだろうけどね。……しかし本当に辛いよ。大好きな人が、どんどん死んでしまふのだから」

おかしい。彼は今にも笑顔を崩し、泣いてしまいそうな表情をしている。今までの彼からは想像もできないその顔に、私は動揺した。どんなときも笑顔で対応し、笑顔で人を騙すこの男。

あなたは一体何者なの？

否、この男は人を騙すためならば何でもするのだ。そして私はそれを知つてゐる。だからこうしていつもと違う自分を見せてゐるのだ。自分を信用させるために。

「亜季が死んで、二週間が経つた頃だ。僕はマンションを引き払つ

た。家具などは全部捨てた。何着かの服と、金さえあればそれで良い。まあその殆どが盗まれてしまつて、今やこの服と財布しかないけど。カードが盗まれなかったのは運が良かったよ。そのおかげで死なずには済んでいるから。しかしおかしいよね。この世に存在してはいけない自分は、生きるのに必死なんだから。死にたくないなんて思つてはいけない存在なのにね」

ついに彼は表情を崩し、悲しそうな目をした。そのとき気付いた。この目は見たことがある。きっと、私はこの人を誰よりも知っている。写真ではあつたけれど、あなたのその表情は、私の好きな人とまったく同じものだ。

ああ、ずるいな。こんな顔されたら、殺したくても殺せないじゃない。

私の手は、自然と机の引き出しから小振りな銃を取り出す。そして銃口は、私のこめかみに当てられる。これで良い。ほら、彼が笑っている。私の好きな彼のその顔が、笑っている。

そうだ。あなたは、菊田銀次なんかじゃない。私の大好きな、篁祐爾だ。あなたのことを悪く言つたりしてごめんなさい。

引き金を引く、カチリという音が、頭の中に響き渡った。

終章 菊田銀次の章

菊田銀次

人の死というものが、どれほど恐ろしいものなのか。俺は、祐爾が死んだそのとき、初めて思い知った。避けなければ良かった。俺が死ねばよかったのだ。

亜季にそう言ったら、そんなことはないと言われた。俺のしたことは正しいのだと、何度も言い聞かせようとしていた。それが余計に辛かった。祐爾が心から好きだった亜季は、死んだのが俺ではなく、祐爾であるのが当然のように言う。

俺はここから間違ってしまったのだろう。俺がこうして、彼女の想いを受け入れてしまったから。もしあのとき断っていれば、君は死ぬことはなかったし、俺たちは親友のままでいられたのだろう。死のう。

そう思ったが死ねなかった。俺には、死ぬ勇気すらなかったのだ。自分の愚かさを呪う。死ぬことも、あいつに謝ることも何もできない。俺は祐爾を死なしてしまったという事実を忘れられないまま、一生を過ごすことになってしまうのか。

亜季は俺を見ていてくれるかもしれない。けれどそれは永遠じゃないと思う。きっと俺のほうから別れを告げるだろう。俺といれば絶対に不幸せになってしまう。

ならば、俺は一体どうすればいいのだろう。

そうだ。俺が篋になるといっただろう。そうすれば亜季を愛することができはすだ。俺は独りになりたくない。今の俺には、親友の死よりもそのほうが優先される。今日から僕は、篋祐爾だ。

気付いたとき、僕は暗闇の中にいた。いつの間にか寝ていたらしい。親友が死んだというのに、良く寝ていられるものだ。

僕自身の手で殺したからだろうか。だから悲しいとは思わない。ただ、僕は本来死んだ身だ。だから死んだ親友の名前を借りよう。そして彼には礼を言おう。君の身体をくれてありがとう。菊田銀次。僕の代わりにゆつくりと寝ていてくれ。

翌日、この「僕」という一人称について亜季から指摘された。その理由は前もって考えてあったので、その通りに伝えた。死んだ親友の一部を受け継ごうと思ったからと。別に嘘は言っていない。多少の誤りはあるものの、僕は死んだ親友から、身体というものを受け継いだ。別に彼女はそれで納得しているのだからそれでいい。僕は彼女を想い続ける。彼にはその自信が無かったみたいだけれど、僕ならば出来る。

彼に出来て僕に出来る、唯一のことだった。

しかし今となつては、彼に出来ることも全て出来る。素晴らしいことではないか。これからは何でも出来る。そう言っても過言ではない。彼の才能は全て僕のものだ。

僕は、亜季と同じ大学に通おうと思ったのだが、彼女が僕のことを考え別の大学に通うこととなった。彼女は、自分が僕に追いつけなかったのが悪いのだと謝った。しかし、悪いのは僕だと思った。なぜなら僕は、他人の頭脳を使用しているのだから。

大学生活最初の夏。亜季は僕に多くの友人を紹介するようになった。それは自慢のためだとわかつていた。けれどいつものように接した。本物の彼のように、誰にでも優しく、恋人とか関係なく優しい人間であり続けた。そうすることで亜季は満足する。それを見ると、嬉しくて堪らなかった。

しかし、そこに恵莉が現れた。彼女は僕が普通でないことをすぐに覚った。きっと彼女は、親類の仲で最も親しかった女性だろう。だから僕のことには薄々気づいているようだった。ただ、僕が菊田だということを前提に何かを探っている。きっと彼女は、僕が菊田銀次を殺そうとしたなどと、信じていない。一方的に僕が殺されたと

思っているはずだ。本当は僕が生きていることを伝えたかったが、それをしては面白くない。だからもう少し待つことにした。

恵莉はきつと何かする。それを見届けたかった。

それから一ヶ月。彼女が住んでいるマンションに向かった。別に彼女に会うつもりはない。ただ、亜季と口を利かなくなったという彼女が、今何をしているのかが気になったから見に来た。それだけの理由だ。

僕は近所の公園やコンビニで、彼女が近くを通るのを待った。

午後五時。コンビニで雑誌の立ち読みをしていると、彼女が目の前を通った。一瞬ドキリとした。ここまで唐突に現れるとは思っても見なかったから。そしてこのあと、彼女が入ってきたら逃げ道はない。しかし彼女は、前を見つめたままコンビニの自動ドアの前を通り過ぎていった。

安心して肩を落とすと、後ろから声を掛けられた。それは毎日のように聞いている声。まさかこのようなところにいるとは思わなかった。恵莉と口を利かなくなっている筈だ。それなのに何故？

「銀くんなんてこんなところにいるの？」

彼女はあまり疑っている風ではなかった。それならば僕の嘘を信じるだろう。

「こっちに良いスポーツ用品店があるって聞いたから、ちょっとね。で、亜季はどうしてここに？」

「ん？ えーと、私はそのマンションに友達がいるから、そこに行くつもりなんだ」

「そうか。しかし驚いたな。こんなところで会うなんて」

「そうだね。やっぱり私たちは神様にも認められたカップルなのかもね」

「かもね。じゃあ、そろそろ行つて来るよ」

亜季と別れ、先ほど口にしたスポーツ用品店に行った。もしもあとで問い詰められたらどうしようもないから。しかしこの周辺のことを調べておいて良かった。

そういえば亜季は何故あの場所にいたんだ？ 本当に友達に会うためののなら良いが、その友達が恵莉だった場合、何をしようというのだろう。

まあ気にしたってしょうがない。とにかく今は、たいした興味もないところで時間を潰し、帰るとしよう。何も買わなかったことを問われた場合の言い訳も考えてある。

二週間後、亜季が僕の車を借りたいと言ったので、快く承諾した。ただ、様子がおかしかったのでその後を尾行した。

すると彼女は、大学の駐車場に車を停めた。一体何をすると云うのだろう。

暫く待っていると、彼女の友達が車に向かっていているのを見つけた。一度会っているので顔は覚えている。ただ、名前までは覚えていないが。

そしてその数分後、恵莉が来た。

僕は慌てて近くの茂みに隠れた。彼女にだけは見つかつてはならない。そう思ったから。彼女は亜季の乗る車の運転席側に立つと、何かを亜季に向けた。それが銃だと気付いたときには、既に銃弾が放たれていた。

亜季が死んで、どれだけの時が経っただろうか。まだ季節が一つ動いただけなのだが、それが何年も経ったように感じる。僕は亜季が死ぬのを見ていた。僕にはそれを止めることが出来たはずだ。

恵莉が亜季を殺すことが有り得ないことではない。どこでだって殺人は行われているのだ。その被害者と加害者が自分の知っている人間であろうと、それはなんらおかしいことではない。

僕は、愛する人を失った。僕はどうすればいいのだろう。復讐か？ だが、そんなことをして誰が喜ぶ。亜季がそれを見ていたとして、彼女は僕になんと言うだろう。ありがと、そんな言葉は出ないはずだ。ならば僕は何をしよう。これからの人生をどう生きよう。否、僕は生きてはいけけないのかもしれない。僕は人を死なせ

すぎた。実際には、この菊田銀次という人間の身体を使っているのがいけないのかもしれない。僕はこの身体を巧く扱えていない。だから僕に関わった人間は死んでいく。

この身体を巧く扱えれば。そう願ったところで、本当の持ち主以外にそれを成すことなど不可能だ。なら、僕はこの身体を彼に返し、そして去ろう。

けれど、もう少しだけこの身体を使わせて欲しい。銀次、それで良いかい？

菊田銀次が使っていた部屋は引き払った。少しの食料と衣類、金などだけを持って、僕は歩いた。少しでも長く、人が生きるこの世界を見ていたいから。

見るものすべてが新鮮だ。青い空を見れば、清しく感じ、沈む夕陽を見れば、切ない思いをする。雨が降る前の土のにおいは、自然を感じれる気がして心地が良い。ときには雨に打たれるのも気持ち良い。

こんな世界に純粋な気持ちで生きられる人間を羨ましく思う。僕はもう、普通の生活を送ることなんて出来ない。それはこの身体を持ち主だって同じだ。僕の所為で、元に戻ったときには悪い思いをするだろう。僕が見てきたものをそっくりそのまま見てきたのだから、尚更だ。

本当にごめん。もう直接謝ることなど適わないのが残念だよ。

数日後、殆どの荷物を盗まれた僕は、見覚えのあるコンビニを見た。外から覗くと、おでんの容器を持った恵莉がいた。

思わず僕は彼女に声を掛けた。何かいろいろと訊いてきたが、適当に答えておいた。そしておでんなどの代金を払った。彼女は部屋に案内してくれた。彼女ならば僕を殺すだろうか。彼女は銃を持っている。そして死んでいるはずの僕を想って、この身体を撃抜くだろうか。

そう思っていると、彼女は口を開いた。

「何故あなたはここに來たの？ 殺されるのが目的なの？」

「そうだね。殺されても良いと思っっている。僕と深い繋がりを持っ
てしまった人は必ず死んでしまう。何故なんだろうね。死んで欲し
くないと望んでも、彼らは皆死んでしまう。君、祐爾のこと好きだ
ったんでしょ？ 知ってるよ。前に、君に告白されたと聞いたから。
それと、亜季を殺したのは君だ。原因はやっぱり僕なだけだね。
ただ、関係のない人を巻き込んだのは君の責任だ。僕には関係ない
よ。まあ、僕を殺したあと自分も死のうとしている人間には、何を
言っても無駄なんだろうけどね。しかし本当に辛いよ。大好きな人
が、どんどん死んでしまうのだから」

違う。すべての責任は僕にある。なのに口が勝手に動いてしまう。
口だけではない。表情から何まで、何もかもが勝手に動く。

「亜季が死んで、二週間が経った頃だ。僕はマンションを引き払っ
た。家具などは全部捨てた。何着かの服と、金さえあればそれで良
い。まあその殆どが盗まれてしまって、今やこの服と財布しかな
いけどね。カードが盗まれなかったのは運が良かったよ。そのおか
げで死なずには済んでいるから。しかしおかしいよね。この世に存
在してはいけない自分は、生きるのに必死なんだから。死にたくな
いなんて思ってはいけない存在なのにな」

何を言っているんだ？ 銀次、君だろう？ 君が動かしているの
だろう？ 止める。そんなことをしたら、彼女は君を殺し、そして
彼女も死んでしまう。それでいいはずがないだろう！

恵莉を見ると、机の引き出しから銃を取り出していた。そして自
分のこめかみに銃口を突きつけている。

何故僕を撃たない？ 否、今はそんなことはどうでも良い。撃つ
んじやない。死ぬんじやない。声を出すことが出来ない。

彼女は引き金に人差し指を添えた。僕はそこで、自らの意識を断
った。

篁祐爾

意識が戻ったと分かったとき、僕はベッドの上で、仰向けに寝ていた。右手に違和感を感じ、それを見ると、恵莉が抱きついていて、これは夢だろうか。

（現実だよ）

聴き覚えのある声。親友であった、この身体所有者だった男の声。声が頭の中に響いてきた。

「……銀次、何で？」

少し間があつて、彼は質問を無視して語りかけた。

（俺たちは、不思議な出来事を体験した。このふざけた身体でな。そしてお前の愛する人と、その友達が死んだ。お前も含め、この身体があるからおかしくなっていく。たぶん、この身体の制御を出来るのは俺だけだと思う。それだけ危険な存在なんだ）

何を言っているのかわからない。それでは銀次とこの身体は、別のものともいうのだろうか。否、そんなことあるはずがない。

「何を言っているんだい？ そんなこと有り得ない。身体と人格は一つだ。別の存在として有り得るはずがないじゃないか」

（じゃあ君は、どうしてその身体を使えるのかわかるかい？ 俺は君に身体を渡そうとはしたが、本当に出来るとは思っても見なかった。それに俺の存在そのものは、この身体の中でずっと生き続けた。この身体は“菊田銀次”と言う名前を持った、悪魔だ。死んだ人間ならば誰でも扱うことが出来る。否、何かしらの適応がなければならぬのかな。例えば、この身体が原因で死に至ったとか）

まだ現実味を帯びない言葉だけれど、それでも説得力がある。きっとこの身体を使ったことが無かったらそんな言葉を信じることは出来なかっただろう。まだ信じきつてはいないのだが。

（信じないのならばそれでもいい。俺だって自分が言っていることが事実だと断言することは出来ない。それでも俺は、この身体を破棄しようと思う。そうすれば、恵莉さんは死なずに済むはずだ）

「恵莉は死さない、か。でも君の言葉が本当だとして、こんな身体がこの世に一つしか存在しないとは限らないじゃないか。ならばこの身体一つ消えたところで、何の意味も無いんじゃないか？」

この言葉は、死にたくない僕の言い訳に過ぎない。しかしそう思ってもいた。この広い世界に一つしかないものが、偶然僕たちの前に現れるなんてこと、あつていいわけが無い。それに、一つしかなかった場合、過去にこれに出会い、壊した人間がいるはずなのだ。今の今までこの身体の危険性に気づく人がいなかったなど、それこそありえないではないか。

（まあ、それもそうかもしれない。ただ、この身体が無くなることで、一人の女性を助けることが出来るんだ。この身体がある限り、また彼女は自ら命を絶とうとするかもしれないだろう？ もうそんなことをさせたくないんだよ俺は！）

「でも恵莉は、この身体の中に僕がいることに気づいた。ならば、この身体が消えたことによつて命を絶つてしまうと思う。そうした場合、結果は同じになるじゃないか。結局はこの身体に関わってしまった時点ですべては決まってしまうんだよ。遅かれ早かれ、ね」そう告げると、彼は黙ってしまった。きっとそのことは分かっていたのだろう。彼はただ、魂の無い彼女の姿が見たくないだけなのだ。彼は恵莉が好きなのだ。彼には彼女の話を話したこともあるし、写真も見せた。そして僕が使うこの身体を通して、ほんの僅かではあるけれど、彼女を見ていた。それだけで、彼は恵莉に好意を抱いたのだ。別に不思議なことでもなんでもない。

僕だって、亜季を一目見たときから好きだったのだ。小さなきっかけさえあれば、誰でも人を好きになれる。少なくとも僕はそう思っているのだ。

だから彼の気持ちだつてわからないでもない。

しかし僕は、愛していた女性が死んでもなお、生きることを望んでいる。恵莉が行き続けることを、彼が望むのであれば、僕は恵莉の側にいて護っていくつもりでいる。それでは駄目なのだろうか。

どんなに問いかけても、声は返ってこない。

僕は恵莉を起こさぬようベッドから出て、足音を立てずに玄関に立った。自分は今、三日もの間着続けた服を身に着けたまま、靴を履いて外に出る。

悪足掻きは止めよう。彼の言うとおりにして失敗したことなんてあるだろうか。彼に背いて後悔したことはあっても、その逆は一度も無い。同じ身体を共有している今でも、それはきつと変わらない。僕と彼とは、元々違う人間。“親友”と言う名の絆はあれど、その中身を共有することなど、出来やしない。

マンシヨンの屋上。柵を越え、端に立つと、あのときのことを思い出す。まだあれから二年も経っていないと言うのに、なにかもが懐かしく感じる。僕が死んだこと、この身体を彼から貰ったこと、亜季が殺されたこと。すべてを失った今の僕にとっては、小さな出来事でしかない。

恵莉には、これまでのことをいつまでも覚えていないで欲しい。僕のこと、太田亜季のこと、菊田銀次のこと。みんな忘れてしまつて欲しい。こんなもの、この先何の役にも立たないだろう。ただ辛い思いをするだけではない。それならば、忘れてしまったほうがどんなに幸せだろうか。

僕はそつと足を前に出す。下ろしても、そこには踏めるものなど無く、引力に任せて落下する。あの時とは違い、何も感じない。恐怖も不安も何もない。僕には、何もない。

彼女が寝ているはずの部屋の窓が見えた。そこから恵莉が笑顔で僕を見ていた。

僕はそれを見て、妙な気分になった。

また繰り返される。僕らのような人間が、また増え続けてしまう。それがわかったというのに、僕は微笑んでいる。僕のこの死も、また無意味だということが、おかしくて堪らない。

僕が最後に見た彼女のその表情は、亜季そのものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1455b/>

Deep Bond

2010年10月9日03時22分発行